

## 詩を通じて見たる杜甫の伝記

## — 其 の 五 —

兒 玉 六 郎

Rokuro KODAMA

本篇は鹿児島大学教育学部教育研究所発行の「研究紀要第六巻」に掲載された「詩を通じて見たる杜甫の伝記」に次ぐものとして、第五篇をなすものである。年令的に言えば、杜甫四十載より四十九載に至る間の生活ぶりを叙する。

## 仕官運動と仕官時代

杜甫は天宝十載（751）四十載の時、朝廷で三大典礼が挙行され、それを寿ぐ賦三篇を献上した。朱鶴齡編譜に依れば「天宝十載辛卯、公年四十にして長安に在り、三大礼賦を進む。玄宗之を奇とし集賢院に待制せしむ。天宝十一載壬辰、公は長安に在り召して文章を試み、有司に送隸し選序に参列す」とあり旧新唐書には三大礼賦を献上したのが夫々天宝の末、又は天宝十三載と記し、更に杜詩鏡銜の杜工部年譜には「魯嘗曰く公三大礼賦を奏す。史集皆以て十三載と為す。紀を案ずるに十載に三大礼を行う。十三載には未だ嘗つて郊をせず。況んや表に云はく臣は陛下の淳杜の俗に生長する。三十載に行はんや。故に当に今歳に在るべきを知る」と述べている。

ともかく三大礼賦とは「大清宫に朝献したもうことの賦」「南郊に事有りたまうことの賦」の三篇であつて、其の外に三篇を奏進するに就いての上表が添えてあり、而して此の献賦には聊かの反応があり、玄宗は其の文辞を賞して集賢院待制、即ち図書寮の御用係を命じ給うた是に依つて文章の能力に対する再度の試験が有り、官吏選考の序列の中に加えられたのである。

然し依然として貧窮に苦しみ、此の窮状を訴えたのが「楽遊園の歌」「杜位が宅にて歳を守る」「鮮于京兆に贈り奉る」等であるが中でも「咸華両県のの諸子に投簡す」の詩は其のことが良く表現されている。

赤県官曹擁才傑	赤県の官曹には才傑おほきを擁し
軟裘快馬当冰雪	軟かき裘と快き馬とは冰雪に当る
長安苦寒誰独悲	長安の苦寒なるとき独り悲しむは誰ぞ
杜陵野老骨欲折	杜陵の野老のみひとり骨の折れんと欲す

楊注には漢書地理志を引用して「杜陵は長安に属す。古へ、杜伯国の宣帝を此に葬る。因りて杜陵と曰う」と記している。尙壯遊詩には、この項の有様を、

坐深郷党敬	坐して郷党の敬を深くして
日覺死生忙	日に死生の忙 <small>あわただ</small> しきを覺ゆ
朱門任傾奪	朱門は傾奪に任せ

赤族送羅殃

<sup>みなごし</sup>族を<sup>たがい</sup>赤にして<sup>わさわい</sup>送<sup>かい</sup>に殃に罹る

と叙する。(玄都壇の歌、元逸人に寄す)は当時の作。同じころ、名作「貧行行」の詩も生まれた。

翻手作雲覆手雨

手を翻せば雲と作り、手を覆せば雨

紛々軽薄何須数

紛々たる軽薄何ぞ数うるを須いん

君不見管鮑貧時交

君見ずや管鮑貧時の交わり

此道今人棄如土

此の道今人棄てゝ土の如し

「交道の薄きを傷みて作る。首句の翻手作雲覆手雨の七字は人情の詭変を写し尽せり」とは少陵新譜の評である。「敬しんで鄭諫議に贈る十韻」「前出寒九首」「高三十五書記を送る十五韻」「集賢院の崔子二学士に留贈し奉る」「韋書記が安西に赴くを送る」「曲江三章五句」「白絲行」「諸公が慈恩寺の塔に登るに同じくす」の詩は同年の作であるが、特に「兵車行」は民の兵役に苦しむのを傷んでの作詩である。

車隣隣馬蕭々

車は隣隣馬は蕭々

行人弓箭各在腰

行人の弓箭は各腰に在り

耶孃妻子走相送

耶と孃と妻と子と走りて相送る

塵埃不見咸陽橋

塵埃は見ず咸陽の橋

牽衣頓足攔道哭

衣を牽き足頓して道を攔つて哭く

哭声直上于雲霄

哭く声は直に上りて雲霄を子かす

唐宋詩醇「筆勢湧洶として風潮の驟まり至るが如し」と評したのも過言ではなからう。実に少陵新譜に見る如く「声情活躍し筆妙千古」と言うべき作詩である。

天宝十二載、杜甫四十二載、何れにしても人生に焦躁を抱く項である。彼が仕進で身を立てんと焦つたことも無理からぬことゝ思われる。杜工部年譜に「天宝十一載壬辰、公長安に在り文章を召試され、有司に送隸して選序に参列せしむ」とあるが、縦え、官吏選考の序列に加えられても一日も早く仕官したいと願つた心情は、彼の貧窮の故も有つたろうがまた「西岳賦」に見えるような肺病という病気の故もあつたのではなからうか。然しそれにも増して重大な素因をなしたものは、此の誠実な人格が時代に対して抱いた危惧と憤懣ではないかと思うことは一層重要な意義を持つであらう。即ち「麗人行」「虜国夫人」の作詩は遠まわしに政事を諷刺している。

こころの作詩には「九日曲江」「高三十五書記に寄す」「哥舒開府翰に投贈す二十韻」「田九判官梁丘に贈る」。特に「何將軍山林」の詩は宋の陳秋田をして「一字の落空なく一語の犯復なし」と嘆賞させた名作である。次にその一首を掲げる。

不識南塘路

南塘の路は知らざりしに

今知第五橋

今は知んぬ第五橋

名園依緑水

名園は緑水に依り

野竹上青霄

野竹は青霄に上る

谷口旧相得

谷口とは旧ねてから相得めるに

濠梁同見招	濠梁に同じく招れぬ
平生為幽興	平生より幽興の為には
未惜馬蹄遙	未だ馬蹄の遙かなるを惜しまざりしなり

天宝十三載、再度此処を訪問したことは「重ねて何氏に過る五首」の詩によつて明らかである。この年八月、淫雨あり為めに關中大いに饑えた。皇帝は淫雨の作物を傷めんことを憂い給うたが、暗愚楊国忠は禾の善なるものを取つて献上し雨は多くとも作物を害するようなことは御座居ませんと言上した旨、資治通鑑に見えている。其頃、杜甫は「鵬の賦」を献上して、再度任官を願つたが実現しなかつた。前述の「重ねて何氏に過る五首」「酔時の歌」「張十二参軍が蜀州に赴くを送り因つて楊五侍御に呈す」「陳二補闕に贈る」「病後王倚に過りて飲み贈りし歌」「裴二虬が永嘉に尉たるを送る」の作詩や、長安県西鄠県の西五里の漢陂での作「城西の陂に舟を泛ぶ」「漢陂の西南の台」「鄠県の源大少府と漢陂に宴す」「漢陂行」などの詩は氣韻深韻である漢陂での詩友岑参の為に杜甫は陰曆九月九日即ち重陽節に思いを寄せたのが「九日岑参に寄す」の詩である。此の外「従孫の濟に示す」「崔駙馬が山亭の宴集」「沈八丈東美が膳部員外郎に除せらるゝを承けしも雨に阻まれて未だ馳賀を遂げず此詩を寄せ奉る」「雨に苦しむ隴西公に寄せ奉り兼ねて五徴士に呈す」「太常張郷に贈り奉る二十韻」「沙范行」「庭前の甘菊花を嘆ず」「秋雨の嘆き」「献納使、起居田舎人澄に贈る」の作がある。

杜甫の生活は依然として苦しく、且つ此年霖雨有り米穀涌貴し、杜甫は残杯冷炙、愈々甚だしい有様であつた。遂に仕官の望みは薄しとし、加うるに天宝十三載は前述の如き不作にして、長安の物価は暴騰した為、長安を去り奉先県の県令楊某氏を頼つて赴いた。そのこと示すのが「橋陵詩三十韻因つて県内の諸官に呈す」の詩である。

荒歳兒女瘦	荒 <sup>あさ</sup> みし歳なれば兒女は瘦せおとろえ
暮途涕泗零	暮途なるわれは涕泗の零ちぬ
主人念老馬	主人は老いたる馬のごときわれを念 <sup>おも</sup> いて
癡署容秋螢	癡署に秋螢も容れたり
流寓理豈恆	流寓 <sup>きすらい</sup> のみなれば豈に理に恆わんや
窮愁醉不醒	窮愁をまぎらわさんとして酔より醒めず
何当擺俗累	何か <sup>いつ</sup> 当に俗累 <sup>はち</sup> を擺いて
浩蕩乘滄溟	浩蕩たる滄溟に乗ぜん

に至つては先立つものが涙である。天下国家を憂え、家族を憂え、なお且つ一身の不甲斐無さを憂うる杜甫の氣持は、彼が誠実な人格であればこそ一層深刻であつたろうと想像されるのである。尙同年の作詩に「鄭駙馬に陪し奉る二首」「諸貴公子に陪して丈八溝に妓を携えて涼を納る晚際に雨に遭う二首」がある。

天宝十四載十一月の作詩「韋左相に上る二十韻」には

才傑俱登用	才傑れたるものは俱に登用せらるゝも
愚蒙佞隱淪	愚蒙なるわれは佞、隱淪するのみ

と仕官出来ない悲しみを歌つた。かゝる身に比べて詩友高適の消息を尋ねたのが「蔡希魯都尉が隴右に還るを送り因りて高三十五書記に寄す」の詩である。従姪の杜勤が射策に落第したのを励まして

乃知貧賤別更苦      乃ち知んぬ貧賤のものには別れの更に<sup>かな</sup>苦しきを  
吞声躑躅涕泗零      声を呑み躑躅して涕泗の零つ

と歌つたのは「醉歌行」の詩で、唐宋詩醇に「造語の妙深く六朝人の佳致を得」たものと評された。「李金吾に陪して花下に飲む」「夜許十一が詩を謙するを聴き愛して作る」「戯れに鄭広文に簡し兼ねて蘇司葉に呈す」夏日李公に問わる」「天育の驃の図の歌」「驄馬行」魏將軍の歌」「白水明府舅の宅にて雨を喜ぶ」「九日楊奉先白水崔明府を会す」「奉出の劉少府の新たに画ける山水の障の歌」「郭給事が湯東の靈湫の作に同じ奉る」。

魯峯の編譜に依ると「十四載十一月安祿山反す。河北の諸郡を陥す。公、京より奉先に赴くとき作有り註に云わく此年十一月作る」とあるが、この安祿山の乱状は、大曆元年秋の作詩「往在」に次の如く叙している。

是時妃嬪戮      是の時妃嬪は戮されて  
連為糞土叢      連りに糞<sup>きた</sup>なき土の叢となりぬ  
当宁陷玉座      当宁にて玉座の陥り  
白間剝画蟲      白間に画蟲も剝がる  
下知二聖処      二りの聖の<sup>ふた</sup>処<sup>ありか</sup>さえも知らず  
私泣百歳翁      私かに百歳の翁の泣きぬ

是時、皇妃宮嬪は殺戮されて、玉座は崩れ門扉の蟲画も剝げ、玄宗肅宗の両宗は行方不明、老人達は秘かなる涙にむせんだと。

同じく、大曆元年秋の作詩「壯遊詩」にも當時を追憶し、

河朔風塵記      河朔に風塵の起りて  
岷山行幸長      岷山に行幸したもうこと長しと述べている。

杜甫が熟願した官途についたのは、かゝる動乱の時であつた。最初に授けられたのは、河西尉であつたが、之は拝辞して受けなかつた。依つて改めて右衛率府胄曹參軍に任ぜられた。

新唐書本伝には河西尉に擢んでらるゝも拝せず右衛率府胄曹參軍に改めらる」と、分門杜詩王序、朱鶴齡編譜にも同様の記述がある。大曆元年秋の作詩「夔府書懷四十韻」に依ると、

昔罷河西尉      昔河西尉を罷めしとき  
初興薊北師      初めて薊北の師興る

と叙しているが、此等の経緯は「官定りて後戯れに贈る」の詩にも明確である。そして奉先県に急ぎ家族に仕官の喜びを伝えようとした。実に安祿山謀反の数日前である。是時の作詩が「京より奉先県に赴くときの詠懷五百字」である。「後出塞」も当時の作。

意外にも、多年の宿望を達した筈の杜甫はこの仕官に満足せず、これより脱せんと画策し、「去矣

行」に

焉能作堂燕            焉んぞ能く堂上の燕となりて  
 銜泥附炎熱            泥を銜みて炎熱に附かむ

と歌つたのは、俗吏と同席するに堪えなかつたが為であろう。

天宝十五載の作詩には「蘇端薛復が筵にて薛華に簡せる醉歌」「晦日崔戢李封を尋ぬ」「率府の程録事が郷に還るを送る」「白水の崔少府十九翁が高斎三十韻」「三川水の漲れるを観る二十韻」「哀しいかな王孫」「陳陶を悲しむ」「青坂を悲しむ」「地を避く」「雪に対す」「舎弟の消息を得たり二首」等がある。

至徳二載(757)、杜甫四十六載、正月安慶緒は遂に安祿山を殺し二月帝は鳳翔に至り、十月広平王俶、郭子儀等は東京を収復し蕭好は鳳翔を発し韋見素を遺して上皇を迎えたもうた。先に、肅宗の即位を聞いて行在に走る途中、賊中にとらえられた杜甫は、まだ長安の獄中にあつたが、この獄中の作「哀しいかな江頭」の詩は蘇轍が「杜の哀江頭の詩は予其の詞気を愛すること 百金の戦馬の如し」と絶賛した程の名作である。

明眸皓齒今何在            明眸皓齒今何くにか在る  
 血汚遊魂帰不得            血は遊魂を汚して帰るを得ず  
 清渭東流劍閣深            清渭は東流し劍閣は深し  
 去往彼比無消息            去往彼比いづれも消息無し  
 人生有情涙沾臆            人生情有りて涙臆を沾おす  
 江草江花豈終極            江草江花は豈に終極あらんや  
 黄昏胡騎塵滿城            黄昏にして胡騎の塵は城に満ちたり  
 欲往城南望城北            城南に往かんと欲して城北を望む

明眸皓齒の楊貴妃も今や白骨、蒼茫として測り難きは神靈の意である。

「幼子を憶う」「一百五日の夜月に対す」「興を遣る」「蘆子を塞ぐ」「大雲寺の賛公の房四首」「雨に蘇端に過る」「晴を喜ぶ」「鄭駙馬が池台にて鄭広文に遭い同飲して喜ぶ」の作詩もこの頃の作と思われる。

杜工部年譜に依れば四月、杜甫は賊を脱して鳳翔に至り肅宗に謁見し左拾遺を授けられたといわれる。「京より竄れて鳳翔に至り行在所に達することを喜ぶ三首」「懐を述ぶ」の詩に明らかである。到着後「樊二十三侍御が漢中判官に赴くを送る」「巖八閣老に贈り奉る」「月」「賈巖の二閣老両院の補闕に留別す」等がある。八月、邠州に帰省。杜工部年譜に「八月邠州にて家を省みる」と。途中麟遊を過ぎて「九成宮」邠州を過ぎて「徒歩帰行」醴泉にて「行くゆく昭陵に次る」白水の西で「彭衙行」の名作がある。宜君で「玉華宮」羌村で「羌村三首」の詩がある。此の旅行の始末は「北征」の雄篇に詳細である。先ず君臣の大義を叙して

君誠中興主            君は誠に中興の主にして  
 経緯固密勿            経緯も固に密勿たり

更に時事を論じ

潼関百万師	潼関百万の師は
往者散何卒	往者に何ぞ卒に散りはてし
遂令半奏民	遂に半奏の民をして
残害為異物	残害せられて異物に為らしむ又妻子の情愛を叙しては
經年至茅屋	年を経て茅屋に至れば
妻子衣百結	妻と子とは百の結れを衣たり
慟哭松声廻	慟哭は松声とともに廻り
悲泉共幽咽	泉は悲しげに共に幽咽す

同年の作詩に「述懐」「韋十六評事が同谷の防禦判官に充てらるゝを送る」「家書を得たり」「張孫九侍御が武威の判官に赴くを送る」「従弟垂が河西判官に赴くを送る」「靈州の李判官を送る」「郭中丞が太僕郷を兼ね隴右節度使に充てらるゝを送り奉る三十韻」「楊六判官が西蕃に使用する送る」「長孫侍御を哭す」「晩行号號」「独酌詩を成す」「重ねて昭陵を経たり」「官軍已に賊境に臨むと聞くを喜ぶ二十韻」「京を収む」「鄭十八度が台州司戸に貶せらるゝを送る」「臘日」の諸作がある。

乾元元年(758)長安に在り。前半は、朝廷に於ける生活を歌う。「賈至舍人が早めに大明宮に朝するに和し奉る」「宣政殿より晩に左掖に出ず」「紫宸殿より退朝する時の口號」「春左省に宿す」に述べられている。この頃の作詩には「晩に左掖より出ず」「省中の院壁に題す」「賈閣老が汝州より出ざるを送る」「翰林張司馬が南海に碑を勒するを送る」「曲江にて鄭八丈南吏に陪して飲む」「曲江にて酒に対す」「曲江にて雨に対す」「曲江二首」「岑參補闕が贈らるゝに答え奉る」「三中允維に贈り奉る」「許八拾遺が江寧に帰り勤省するを送る」「許八に因りて江寧の旻上人に寄せ奉る」「李尊師が松樹の障子に題する歌」「舍弟の消息を得たり」「李校書を送る二十六韻」「偏側行畢四曜に贈る」「畢四曜に贈る」「鄭十八著作丈が故居に題す」「義鶻行」「画鶻行」「端午の日衣を賜う」の諸作が見える。

六月、貶せられて華州司功參軍となる。分門杜詩王序に「甫を出して華州司功と為す」と述べてある。その憂憤は「試進士策問五首」「瘦馬行」「孟雲郷に酬ゆ」の詩に明らかで、詩の題名の示す如く「至徳二載甫京の金光門より出で間道より鳳翔に歸る。乾元の初め、左拾遺より華州の掾に移され親故と別る因つて此の門を出で往事悲しむ有り」という長途の旅についた。赴任の途中の作は「高三十五詹事に寄す」「高式顔に贈る」「華果の亭子に題す」「岳を望む」である。華州での作詩には「早秋熱に苦しむ推案相仍る」「安西の兵の過ぐるを觀る関中に赴きて命を待つ二首」「九日藍田の崔氏の莊」「崔氏東山草堂」「興を遣る三首」「獨立」「至日興を遣り北省の旧閣老兩院の故人に寄せ奉る二首」「路にて襄陽の楊少府が城に入るに逢い戯れに楊四員外綰に呈す」「冬未事を以て東都にえかむとし湖城の東にて孟雲郷に遇い復び劉暉が宅に歸りて宿す宴飲散ず因つて醉歌を作る」「閩卿の姜七少府繪を設く戯れに長歌を贈る」「戯れに閩卿の奏少府に贈る短歌」「李鄠県丈人が胡馬行」「觀兵」の作がある。

